

# 副助詞クライの程度用法

—評価を軸としないクライの分類について—

言語学・応用言語学専門分野

1LT14129K

2014（平成 26）年入学

松尾結花

2018（平成 30）年 1 月提出

## 要旨

本論文は評価を軸としないクライの分類について考察したものである。丹羽（1992）をはじめとした多くの先行研究では、評価を軸としたクライの分類が行われている。しかし丹羽（1992）の分類では、クライが高低評価を与えるとして分類をしている点や、クライではなく前節要素によって分類をしていることなどの問題点が見られる。そこで本論文では評価を軸としないクライの分類を行い、丹羽（1992）によるクライの分類との比較によって、評価を軸としない方がよりクライの機能に沿った分類が行えると主張した。

## 目次

1. はじめに .....	1
2. 先行研究におけるクライの分類について .....	2
2.1. 丹羽（1992）における副助詞クライの分類 .....	2
2.2. 丹羽（1992）の程度用法 .....	2
2.2.1. 高程度 .....	2
2.2.2. 低程度 .....	3
2.2.3. 適当程度 .....	3
2.2.4. 同程度 .....	4
2.2.5. 不定程度 .....	4
2.2.6. 概量 .....	5
2.3. 丹羽（1992）の取り立て用法 .....	5
2.3.1. 例示 .....	5
2.3.2. 最低限の例示 .....	6
2.4. 丹羽（1992）による分類の問題点 .....	6
3. クライの分類 .....	9
3.1. P クライ文の用法 .....	9
3.1.1. 概量 .....	10
3.1.2. 最低限の例示 .....	10
3.2. P クライ Q 文の用法 .....	11
3.2.1. 値指示用法 .....	12
3.2.2. 結果状況用法 .....	13
3.2.3. スケール極限值用法 .....	14
4. 丹羽（1992）との比較 .....	16
5. まとめ .....	21
参照文献 .....	22

## 1. はじめに

本論文において取り上げるのは、副助詞クライの程度用法についてである。一般に程度用法とされるクライに以下のようなものがある。

- (1) a. こちらが恥ずかしくなるクライ純情だ。
- b. それらは病気そのものと同じクライ、彼女の身体を蝕んでいた。

この例文では「こちらが恥ずかしくなるクライ」「病気そのものと同じクライ」という部分が、「純情」「蝕んでいた」の程度を表している。これまでの研究ではこのようなクライの程度用法について、クライによる評価を軸とした分類が行われているものが多く、例えば上の例文では(1a)のクライは高程度、(1b)のクライは同程度として分類されることが多い。しかしながらこのようにクライによる評価を軸とした分類を行う場合、クライの前節要素の評価に引っ張られてしまっているということはないだろうか。またクライの用法は、クライの評価に言及しなければ分類を行うことはできないのだろうか。

本論文では、クライの評価を軸としない分類についての考察を行うことを目標とし、2章で先行研究である丹羽（1992）におけるクライの分類とその問題点を取り上げ、3章で評価を軸としないクライの新たな分類を主張する。なお加藤（1996）ではクライとグライの違いや使い分け等について論じられているが、本論文ではクライとグライを区別せず、同一のものとして扱う。

## 2. 先行研究におけるクライの分類について

程度を表す副助詞クライの分類の先行研究としては、丹羽（1992）や井島（2008）などがある。丹羽（1992）は程度用法と取り立て用法の関連を考察しながら、クライの評価を軸とした細かな分類を行っており、井島（2008）は並列・添加の副助詞モ・サエ・マデ・デモ・ダッテの分析に用いた〈実現可能性〉との比較により、基本用法から〈行為評価〉の用法を区別し分類を行っている。他の副助詞との比較という点では、丹羽（1992）をはじめ田中（2003）や須川（2006）のように、クライの機能を同じく程度を表す副助詞であるホドと比較し、合わせて明らかにしようとしたものも多い。このようなクライとホドとの比較においても、しばしばクライの評価が考察の一つの要素となっている。またクライは丹羽（1992）以外にも、安部（1999）や丸山（2001）などのように程度用法ととりたて用法の区別やその関係について取り上げているものが見られるが、本論文においては程度用法ととりたて用法といった区別は取り上げず、問題としない。

本論文では先行研究の中でも特に細かな分類が行われている丹羽（1992）を代表例として取り上げ、その問題点について考えていく。

### 2.1. 丹羽（1992）における副助詞クライの分類

丹羽（1992）では、クライをはじめとする副助詞には程度用法と取り立て用法を合わせ持つものがあり、さらに程度用法においてその程度の表し方は具体的には種々あるとされており、クライについてはその程度用法を6つに分類している。以下にその丹羽（1992）によるクライの程度用法の分類と諸用法の詳細を整理する。

### 2.2. 丹羽（1992）の程度用法

丹羽（1992）によれば、〈YをXではかる〉と一般に規定できる程度用法において、その程度の表し方は具体的には種々あるとされている。クライ、そして丹羽（1992）でクライと合わせて考察されているホドおよび程度の形式は、「Yの程度はXの程度に相当する」と規定できる程度（相当程度）を表すとある。これは以下のように様々な用法に分けられる。なお以下の例文は丹羽（1992）から引用したものであり、本論文ではホド・程度の分類については扱わないが、丹羽（1992）での表記通り例文中のホド・程度も合わせて引用している。

#### 2.2.1 高程度

はじめに挙げられていたのが〈高程度〉である。丹羽（1992）では、クライが使われた〈高程度〉の例文は5つある。

- (2) a. 透き通るホド／クライ色が白い。[丹羽 1992:1122, (1a)]<sup>1</sup>  
 b. 鯨ホド／クライもある大きなセイウチが発見された。[丹羽 1992:1122, (1c)]  
 c. 警察はつぎの日またやって来て、今度は M の持っていた本やらなにやら全部外に引っぱり出して往来の真ん中で火をつけた……こっちにまで飛火して火事になるんじゃないかと思ったホド／クライだよ。[丹羽 1992: 1122, (2)]  
 d. この話ホド／グライ面白い話は（他に）ない。[丹羽 1992: 1122, (4a)]  
 e. 二人で過ごす時ホド／クライ楽しい時間は（他に）なかった。[丹羽 1992: 1122, (4b)]

この〈高程度〉は程度が高いことを表す用法である。例えば(2a)「色が白い」程度は「透き通る」程度に相当するということだが、これらはその程度が高いという評価を与えられている。(2d)や(2e)にあるホド／クライ～ナイは高程度文の否定であるが、(2d)で言えば、「この話」は「面白い話」に含まれる関係にあり、「面白い話」の中で「この話」に比べて「他の話」は面白くない、ということを表す。つまり「この話」が最高程度であることを表すことになる。とある。

### 2.2.2 低程度

次に挙げられていたのが〈低程度〉である。丹羽（1992）の〈低程度〉の例文は以下の3つである。

- (3) a. 効用と言え、せいぜい人に安心感を与えるクライだ／程度だ。[丹羽 1992: 1123, (6a)]  
 b. 私はアルメニア語は話せないが、基礎語彙や動詞の活用などを調べてアルメニア語であるかないか判断できるクライの知識はある。[丹羽 1992: 1123, (6b)]  
 c. 山田クライの／程度の学生ならいくらでもいるよ。[丹羽 1992: 1123, (6c)]

〈低程度〉は相当程度ではあるが、その程度が低いという評価を与えられている。高程度がホド・クライで表されたのに対して、低程度はクライ・程度で表されるとされている。

### 2.2.3. 適当程度

次は〈適当程度〉である。丹羽（1992）の中で〈適当程度〉として挙げられたクライを含む例文は以下の1つしかなかった。

---

<sup>1</sup> 丹羽（1992）から引用した例文中のクライやホドは、位置を明示的にするため筆者がカタカナに変換している。

- (4) 病氣しない程度に／クライに頑張りなさい。[丹羽 1992: 1123, (7a)]

〈適当程度〉は高い程度でも低い程度でもない、ほどほどの程度を表す用法であるとされる。

#### 2.2.4. 同程度

次に挙げられていたのが〈同程度〉である。丹羽（1992）の〈同程度〉の例文は以下の2つである。

- (5) a. 君は今、トルコ東部の住民と同じクライにこの国を理解したわけだが、それで以前より幸せになったとは言えないだろう。[丹羽 1992: 1124, (8a)]  
b. 前回ホドの／クライの／程度の記録ができれば十分だ。[丹羽 1992: 1124, (8b)]

はじめの3つの用法は、相当程度の中で高、低、ほどほどという評価を表していたが、この〈同程度〉の用法は評価を伴わない。具体的に見ると、(5a)は「同じ」と明示されているから、同程度であることは明らかであるが、(5b)でも「前回と同じクライの記録」と意味的に変わらない。この用法はXとYが同種類の事態であることが必要で、(5a)では「君のこの国に対する理解程度はトルコ東部の住民のこの国に対する理解程度と同じ程度だ」、(5b)では「今回の記録が前回の記録と同じ程度であれば十分だ」ということを表しているとされる。

#### 2.2.5. 不定程度

次に挙げられていたのが〈不定程度〉である。丹羽（1992）の〈不定程度〉の例文は以下の4つである。

- (6) a. どれホドの／クライのものなんだろう？[丹羽 1992: 1124, (9a)]  
b. どのクライ／程度来ているの？[丹羽 1992: 1124, (9b)]  
c. どれホド／グライ驚いたことだろう。[丹羽 1992: 1124, (9c)]  
d. どれホドかは／グライかは入っている。[丹羽 1992: 1124, (9d)]

〈不定程度〉は程度が不定であることを表す用法である。不定語に伴うときは、(6a)や(6b)のように疑問語疑問文として程度の高低あるいは具体的な数量を問う場合と、(6c)や(6d)のように程度を不定のまま示す場合がある。その中でも(6c)は高程度に入ると考えるべきかもしれないと述べられている。

### 2.2.6. 概量

最後が〈概量〉の用法である。丹羽（1992）で挙げられた〈概量〉の例文には以下の4つがあった。

- (7) a. 十分ホド／クライ／程度待った。[丹羽 1992: 1125, (10a)]
- b. 五回ホドは／クライは／程度は行ったことがある。[丹羽 1992: 1125, (10b)]
- c. この二日ホドが／クライが山だね。[丹羽 1992: 1125, (11a)]
- d. 一時間ホドを／クライを／程度を練習に当てた。[丹羽 1992: 1125, (11b)]

数量詞に伴う場合、「十分に相当する程度」つまり「およそ十分」という概量を表す。丹羽（1992）では「数量詞＋副助詞」は程度用法とも取り立て用法とも理解されており、この中では X が Y をはかるという関係を表す(7a)や(7b)はより程度用法的で、格関係に立ってそういう関係を直接表さない(7c)や(7d)はより取り立て用法的であると言及されている。

以上のようにクライ・ホド・程度の程度用法を分類した上で、丹羽（1992）は高低評価を伴わない場合は三者いずれも可能で、高低評価を表す場合はホドが高程度を表し、クライは高程度を表すこともあるが低程度も少なくなく、程度は低程度に傾くという傾向があって、全てに共通して相当程度という大体の量を表すとまとめている。

### 2.3. 丹羽（1992）の取り立て用法

さらに、丹羽（1992）ではクライの取り立て用法は意味的に程度用法にかなり近いと前置きした上で、取り立て用法についても程度用法と同じように分類がなされている。ここで取り立て用法とされるのは、並行する諸事態のうちで成立する範囲を、当該助詞によって取り上げるようなものである。丹羽（1992）において、クライの取り立て用法は以下の2つに分類される。

#### 2.3.1. 例示

取り立てのクライの1つ目の用法が〈例示〉である。丹羽（1992）で〈例示〉とされる例文は以下の4つである。

- (8) a. 軽井沢グライで遊びたいね。[丹羽 1992: 1125, (12a)]
- b. 中元はビールグライがいいんじゃない。[丹羽 1992: 1125, (12b)]
- c. 木曜日クライから始めよう。[丹羽 1992: 1125, (12c)]
- d. 地下室にはワイン倉を持ち、エルザスの作り酒屋から直接購入していることグラ



イが友人への自慢の種で……[丹羽 1992: 1126, (12d)]

〈例示〉は名称の通り、クライが例示を表す用法である。程度用法においてクライの表す程度は X に相当する程度ということだったが、こちらは(8a)で言えば「軽井沢ないしそれに相当するところ」ということで、共に当該事項の近傍を漠然と表す点で共通しているとされる。またこの例示は「軽井沢かどこか」という選択的なものであるが、程度用法も程度 X の候補が様々可能な中で、その内の一つの程度を X として選ぶものであるため、この点でも共通していると論文中で述べられている。

### 2.3.2. 最低限の例示

取り立てのクライのもう一つの用法が〈最低限の例示〉である。丹羽(1992)の中で〈最低限の例示〉として取り上げられている例文は以下の4つである。

- (9) a. 散歩クライしたらどうだ。[丹羽 1992: 1126, (13a)]  
b. 訂正クライできる。[丹羽 1992: 1126, (13b)]  
c. 映画にクライ行ったけど。[丹羽 1992: 1126, (13c)]  
d. きょうクライはのんびりしよう。[丹羽 1992: 1126, (13d)]

(8d)の例は「エルザスの作り酒屋から直接購入していること」に低い評価が与えられているが、さらに最低限の例示を表すのがこの用法である。具体的には、(9a)は「忙しくて体を動かす暇はないかもしれないが、少なくとも散歩とかそれに類することをしたらどうだ」という意味になる。これは相当程度の中の低程度用法と連続的で、「散歩」「訂正」などに「少なくとも」といった最低限の意味が与えられている。

### 2.4. 丹羽(1992)による分類の問題点

以上のように丹羽(1992)ではクライおよびホド・程度の表す程度は細分化されており、特に高低評価を伴う場合について細かく分類が行われている。しかし、この丹羽(1992)の分類の中では、PクライQという文章においてまるでクライ自体がPに高程度、低程度などの意味や評価を与えているかのような印象を受けるが、本当にそうなのだろうか。

例えば、「Pクライ食べる」という文章があるとすると、このPの部分を使い換えてみると、以下のような文ができる。

- (10) a. お腹がいっぱいになるクライ食べる。  
b. あとでお腹が空かないクライ食べる。

ここでは(10a)の「お腹がいっぱいになる」、(10b)の「あとでお腹が空かない」が先ほどのPの部分に当たる。それぞれの文章の意味として、(10a)は食べ終わったときにお腹がいっぱいになってしまう程度にたくさんものを食べるということになり、(10b)はあとでお腹が空くことのない程度にほどほどにものを食べるということになる。丹羽(1992)では、(10a)のクライは高程度、(10b)のクライは適当程度に分類されると考えられる。しかしながらこれらの文と前提として置いた「P クライ食べる」という文を見比べると、クライと結びつく部分がPという不確定な状態にある「P クライ食べる」という文章のままでは、P、クライ、およびPクライのどれにも明確な評価を読み取ることができないのに対し、Pに「お腹がいっぱいになる」「あとでお腹が空かない」という具体的な文が挿入されることによってはじめてPクライにあたる部分の評価が確定されるようになる。クライが前節要素Pに高程度・適当程度などの評価を与えるならば、具体的な文が提示される前のPクライの時点でPに何らかの評価が与えられてもいいように思われるが、この例文ではむしろPに具体的な内容が与えられてはじめてPクライの高低評価が決められているようなのである。このことから、丹羽(1992)の分類のようにクライがこの文でいうPの部分にそれぞれ高程度、適当程度という評価を与えるというよりは、P部分に挿入される文がはじめから高程度、適当程度にあたる評価を持っており、クライはPの部分に評価を与える機能とは別の役割を果たしているのではないかと考えられる。

加えて、「Pクライの金額」という文章について、Pの部分のみを言い換えて以下のような文を作る。

- (11) a. 国家予算に匹敵するクライの金額。
- b. 小学生の小遣いにも満たないクライの金額。
- c. 太郎の給料と同じクライの金額。

こちらは先ほどのクライ文と異なり「クライの」の形ではあるが、やはりクライと結びつくPの部分の内容によって、文の意味や程度評価が大きく変化している。それぞれの文の意味としては、(11a)は国家予算に匹敵すると言っても差し支えない程度の大きな金額、(11b)は小学生の小遣いと比べてもそれより劣ってしまうような少ない金額、(11c)は太郎の貰っている給料と同程度の金額というものになり、丹羽(1992)では(11a)のクライが高程度、(11b)のクライが低程度、(11c)のクライが同程度の意味に分類される。ここでクライの有無による文の意味の変化をみるために上の例文から「クライの」を抜くと、以下のような文になる。

- (11) a'. 国家予算に匹敵する金額。
- b'. 小学生の小遣いにも満たない金額。

c'. 太郎の給料と同じ金額。

(11a')(11b')(11c')の文を見ると、文全体の意味として(11a)(11b)(11c)の元の文と全く同じ意味にはならないものの、意味が全く別のものになっているかといえばそうでもない。「クライの」を抜いた(11a)は国家予算に匹敵する大きな金額、(11b)は小学生の小遣い以下の少ない金額、(11c)は太郎の給料と同等の金額をそれぞれ表しており、「クライの」を抜く前とその文の示す金額の高低評価は大きく変わっていないように感じられる。このことから、やはりクライがPの部分へ高低評価などを与えているというよりも、クライと結びつく前節要素であるPそれ自体がはじめから何らかの程度評価を持っていると考えるべきである。

また丸山(2001)では丹羽(1992)のクライの程度用法の分類について脚注の中で、〈高程度〉〈低程度〉〈適当程度〉〈同程度〉の分類は文脈から決まるものであり、クライそのものの意味はあくまで「基準の例示」であると言及している。なるほど、確かに丹羽(1992)では程度用法のクライは全てに共通して相当程度という大体の量を表すとまとめられており、クライの意味自体は変わらないものとして分類が行われているとも解釈できる。しかし、その場合クライが前後の要素に評価を与えるという考えは否定されるものの、分類はクライ自体の意味ではなくクライの前後の文脈に引っ張られたものになってしまうため、やはりクライの分類案としては不十分である。

### 3. クライの分類

ではクライの評価を軸としない場合、どのような分類が行えるのか。ここからはPクライ文とPクライQ文に分け、クライの用法について考察を行っていく。

まず、ここで述べるPクライ文、PクライQ文とは、例えば次のようなものである。

(12) この作業が終わるまで3日クライかかる。

(13) 花子は太郎クライ背が高い。

(12)と(13)のクライの前節要素である「3日」「太郎」をP、(13)の「太郎クライ」によって修飾される「背が高い」をQとする。よって上の例文では、(12)がPクライ文、(13)がPクライQ文となる。ここでPクライ文とPクライQ文を分けるのは、Pに焦点が置かれPクライのみで完結するものと、Qに焦点が置かれPクライがQの程度を表す修飾部となるものとを、クライの機能を考えるうえで区別すべきであると考えたためである。なお「クライの」「クライは」など、クライの後につく助詞による用法の大きな違いは見られなかったため、今回はクライに続く助詞については分類を行う上で特に問題としない。

またクライの意味に関しては、どの用法においてもクライは前節要素Pと結びつくことにより「だいたい～」「おおよそ～」など結びついたものの量や範囲などを広げる意味を共通して持つと考えられる。例えば(12)と(13)は本論文においては別の用法に分類されるが、(12)の「3日クライ」はクライがつくことで「だいたい3日」というように「3日」だけのときよりも日数の範囲が広がっている。(13)では背の高さの指標として「太郎クライ」が挙げられており、文としては「花子の背の高さがおおよそ太郎の背の高さである」ということを示している。ここでもクライがつくことで、「太郎」だけのときよりも示すことのできる高さの範囲が広がっていると考えられる。これよりクライはどの用法においても共通して、結びついたものの量や範囲などを広げる「だいたい～」「おおよそ～」といった意味を持つことを前提とした上で、各用法においてさらにクライがどのような機能を持つのかを見ていきたい。

#### 3.1. Pクライ文の用法

はじめにPクライ文におけるクライの役割についての考察を行う。前述の通り、ここではクライの前節要素をPとして扱う。Pクライ文におけるクライの用法は、以下の2つである。

### 3.1.1. 概量

〈概量〉は「おおよそ P」という概量を表す用法である。この用法に分類されるのは、以下のような文である。

- (14) a. 4時間クライ歩き回ったことになるが、ホテルに戻るとちょうどお昼時だった。
- b. 林道の終点三十メートルクライ手前に、林道から右に入る道がある。
- c. 二年クライ勉強をするつもりで行ってきたらどうか。
- d. 課題は明後日クライで終わるはずだ。
- e. 全部で千五百頁クライ。

これは丹羽（1992）のクライの分類における程度用法の中の「概量」とおおよそ同じであるが、程度用法と取り立て用法とを区別していないことや、クライに付く語を数量詞に限定していないことから丹羽（1992）における概量用法よりも該当範囲が広いものになっていると思われる。この用法におけるクライの役割を考えるために、上の文からクライを抜いたものをつくると、それぞれ以下のようになる。

- (14) a'. 4時間歩き回ったことになるが、ホテルに戻るとちょうどお昼時だった。
- b'. 林道の終点三十メートル手前に、林道から右に入る道がある。
- c'. 二年勉強をするつもりで行ってきたらどうか。
- d'. 課題は明後日で終わるはずだ。
- e'. 全部で千五百頁。

これらの文におけるクライの有無による違いは、P 単独の場合と P クライの場合で指し示すことができる範囲に差が出てくるという点である。例えば(14a)および(14a')では「4時間」が P 部分にあたるが、P 単独、つまり「4時間」で指す範囲と P クライ、つまり「4時間クライ」で指す範囲とを比べると、「4時間クライ」の方は「おおよそ 4時間」、具体的には「3時間半から 4時間半」といった範囲を指すことができ、P のみの「4時間」よりもクライのついた「4時間クライ」の方が指す範囲が広がっている。このことから、この用法におけるクライの役割は、P と結びつくことにより指し示す範囲を広げ、「おおよそ P」というだいたいの量を示すものであるといえる。

### 3.1.2. 最低限の例示

〈最低限の例示〉は P へ低い評価を与える用法である。この用法に分類されるのは、以下のような文である。

- (15) a. 散歩グライしたらどうだ。[丹羽 1992: 1126, (13a)]  
 b. 訂正グライできる。[丹羽 1992: 1126, (13b)]  
 c. 映画にクライ行ったけど。[丹羽 1992: 1126, (13c)]  
 d. この映像を見て泣かなかったのは君クライだよ。

この用法は丹羽（1992）の取り立て用法の中の〈最低限の例示〉の用法として分類されていたものとほとんど同じものである。上記の例文からクライを抜くと以下ようになる。

- (15) a'. 散歩したらどうだ。  
 b'. 訂正できる。  
 c'. 映画に行ったけど。  
 d'. この映像を見て泣かなかったのは君だよ。

元の文と下のクライを抜いた文を比べると、明らかにクライの有無によって文の意味が異なってしまう。これらの文では「散歩グライ」「訂正グライ」「映画にクライ」「君クライ」とクライがつくことで直前の散歩や訂正などが程度の低いもの、例えば(15a)においては「せめて、最低限散歩ぐらいしたらどうだ」と散歩というクライの直前要素 P が最低限の行為として例示されている。この用法においてはクライの有無によって文の意味が異なってくることから、クライ自体が直前要素 P へ「それが最低限の物事である」という意味を加え、P の程度を低いものとして扱っていると考えられる。

またはじめにクライはどの用法においても「だいたい～」「おおよそ～」の意味を持つと述べたが、この用法においては「だいたい～」「おおよそ～」といった意味は文中に感じられにくい。しかし例えば(15a)の「散歩グライしたらどうだ」という表現は、「散歩」「買い物」「トレーニング」など様々な行為が想定される中、「散歩」やそれに類する程度の低い行為をしたらどうだ、という意味であり、間接的に「散歩」と同列の行為を相手に勧めている。このことから「だいたい～」「おおよそ～」の意味合いは薄いものの、最低限の例示の用法においても、他の用法と同じように結びついた前節要素 P の範囲などを広げる意味自体は含んでいるといえるだろう。

### 3.2. P クライ Q 文の用法

次に P クライ Q 文を取り上げ、P クライが Q の程度を表すものについて考えていく。ここでの Q の程度とは、例えば Q が「背の高さ」などであればその高低、優劣などの度合いにあたるものである。またここでは物事の程度を評価する際、問題となる程度について何らかの幅が想定され、その幅の中での位置づけによって程度の高低評価がなされるものとする。以降そこで想定される幅をスケール、そのスケール上において位置づけられた一

点を値と呼ぶこととする。本論文では、P クライ Q における Q はあるスケール上において特定の値を持つものとし、P クライはその Q の値を特定させるための要素であると考え。以下にまとめるのは、Q のスケールや値と P クライとの関係によって用法を分類し、そのクライの役割について考察を行ったものである。

### 3.2.1. 値指示用法

1 つ目の用法は、P クライ Q という文において P が何らかの状況を示しており、Q のスケール上の値を P クライで特定するものである。この用法に分類されるものに、以下のような文がある。

- (16) a. 今日ヴィクトリア女王につぐクライ有名な人物。
- b. インカの井戸クライ深いため息をつく。
- c. 見る物全てが夕張と同じクライ汚い。
- d. 一国の国家予算に匹敵するクライのカネを動かす。
- e. 先日の祭クライの賑わい。

これらはそれぞれクライの前につく「今日ヴィクトリア女王につぐ」「インカの井戸」「見るもの全てが夕張と同じ」「一国の国家予算に匹敵する」「先日の祭」が P クライ Q の P にあたり、クライや「クライの」に続く「深い溜息」「有名な人物」「汚い」「カネ」「賑わい」が P クライ Q の Q にあたる。

この用法で注目すべきは、P と Q の値が共通のスケール上にあるという点である。例えば(16a)で問題となるのは「有名な人物」という Q の値がどの程度か、つまり「有名」スケールにおいて Q の値がどこに位置づけられるのかということである。そこで Q の値を特定する手掛かりとなるのが P である。(16a)の P 部分にあたる「今日ヴィクトリア女王につぐ」という表現には、今日において大変有名なヴィクトリア女王の次に位置づけられるほどに有名である、という評価が含まれているため、P はすでに「有名」スケール上における値を持っている。つまりどの程度有名か、という問いに対し P クライが、Q は「有名」スケール上において今日ヴィクトリア女王につぐという評価と同等の値を持つ、ということを示している。この用法における P 部分は、クライと結びつくことで Q のスケール上に位置づけられる一つの値として扱われており、P クライ Q の形になることで、Q のスケール上において Q の値がおおよそ P の値と同等である、ということを表しているといえる。ここで P と Q の値が全く同じではなくおおよそ同じという表現となるのは、前述の通りクライが P で指す範囲を広げる意味を持っているためである。

このように P クライの形で「だいたい～」 「おおよそ～」の意味合いを加え、P のみの場合よりも指し示す範囲を広げるというこの用法でのクライの役割は、前述した〈概量〉

の用法とほとんど変わらない。ただしこの用法ではPクライQの形でPクライによってQの値を示す働きをしているのに対し、〈概量〉の用法ではPクライの形でクライがPの指す範囲を「だいたい～」と広げるのみに留まっており、Qの値を定める役割を持つか否かという点において両者は異なっているといえる。

### 3.2.2. 結果状況用法

2つ目の用法は、PクライQという文においてPがQの結果として生じる状況であり、Pという状況を述べることによって聞き手にQの値を推測させるものである。この用法に分類されるのは、以下のような文である。

- (17) a. 誰もが飛び上がって驚くクライ迫力のある映像。  
b. 山小屋の粗末きわまりない食事も苦にならないクライ、日の出は素晴らしかった。  
c. 私は声をかけにくいグライ硬い表情をしているだろう。  
d. 雪がかなり積もっていて、途中断念した方が無難かなとまで思ったクライだった。  
e. フィンランド大使館の人に調べてもらいたいクライの傑作。

この例文ではクライの前節要素である「誰もが飛び上がって驚く」「山小屋の粗末きわまりない食事も苦にならない」「声をかけにくい」「途中断念した方が無難かなとまで思った」「フィンランド大使館の人に調べてもらいたい」がP、「迫力のある映像」「日の出は素晴らしかった」「硬い表情をしている」「雪がかなり積もっていて」「傑作」がQにあたる。ここでのPは先ほどの用法とは異なり、Qのスケール上における値を持つのではなく、Qによって起こり得る状況を述べているに過ぎない。Qの値であればどういうことが起こるのかをPクライで示して、Qの値の位置づけを推測させているのである。

例えば(17a)では「迫力」スケールにおいて、その映像がどの程度迫力のある映像であるのかを表す具体的な値は与えられていない。代わりにその映像により「誰もが飛び上がって驚く」という状況が引き起こされることを示し、そういう状況が起こるのなら迫力はだいたいこの程度だろう、とその映像の「迫力」スケールにおけるQの値を推測させることによって、Qの程度を伝えている。このときクライはPと結びつくことによりQの値はだいたいPが引き起こされる程度である、ということを示していると考えられる。

また(17d)は一見PクライQの形ではないように感じられるが、「途中断念した方が無難かなとまで思ったクライ雪がかなり積もっていた」という文の倒置と考えると、「途中断念した方が無難かなとまで思った」がP、「雪がかなり積もっていた」がQにあたるPクライQの文として考えることができる。



### 3.2.3. スケール極限值用法

3つ目はPクライQという文において、Qについてどのようなスケールを取るか、Pでスケールの端を示し、Qの値がそのスケールにおいて高い度合いに達していることを示すものである。この用法に分類されるのは、以下のような文である。

- (18) a. 透き通るクライ色が白い。[丹羽 1992: 1122, (1a)]<sup>2</sup>  
b. 見えないクライ小さくする。  
c. 体が燃えるクライに熱い。

この例文におけるPは「透き通る」「見えない」「体が燃える」というクライの直前部分であり、Qは「色が白い」「小さくする」「熱い」というクライや「クライに」の後に続く部分となる。特徴的なのは、Pが実際には起こり得ないような状況である点である。例えば(18a)のような表現は肌の色の白さを形容する際に使われるが、どれだけ色が白くなっても、肌が実際に透けてしまうようなことはないだろう。つまりこのような表現では、実際に肌が透けているということを述べているわけではない。Pの状況にまで至ることはないが、そう言えるほどにQの程度が甚だしいということを表しているのである。

ここでQのスケールと値について考える。(18a)で問題とするのは「白い」スケール上の値の位置づけであるが、「白い」スケールには様々なものが想定し得る。例えば一口に肌が「白い」と言っても、陽に焼けていないという程度の意味での白さなのか、また人種による肌の色の違いから見た白さなのかで設定されるスケールは異なってくる。その中で、この文はPクライの形でPの状況を極限とした、つまり最上級が「透き通る」程度である「白い」スケールをQのスケールとして設定していると考えられる。そしてその「透き通る」を極限とした「白い」スケールの中で、Qの値は極限值である「透き通る」の値にまで至ってはいない。しかしながらQはそれに相当する程度、仮にスケールの上から3割の範囲をその「白い」スケールにおける合格点とするならば、Qの値はそのスケールにおける合格点には至っているということがPクライQによって表されていると思われる。

ここでのクライの機能を考えると、Qのスケールの極限がPであると設定すること、そしてそのスケールにおいてQの値は極限には至っていないものの、合格点に達する程度であることを示すものとなる。また章のはじめで述べた通り、クライは結びついたものの範囲を広げる「だいたい～」「おおよそ～」の意味も持つため、厳密には「Qの値はPを極限としたQスケールにおいておおよそ合格点に達する程度である」ということを示してい

---

<sup>2</sup> (18a)は筆者が丹羽(1992)の例文から「ほど」を削除した上で、例文中のクライをカタカナ表記に書き換えたものである。

るといえる。

余談だが、この用法におけるクライは香月（2018）で記述されているマデアルの新用法での言い換えが可能である。

- (18) a'. 色が白くて透き通るマデアル。  
b'. 小さくて見えないマデアル。  
c'. 熱くて体が燃えるマデアル。

このマデアルは香月（2018）における〈到達〉の用法にあたる。〈到達〉の用法について香月（2018）では、普通ではありえない事象を提示して、前述されているものの程度がそこまで到達するほど程度が甚だしいことを示す表現であると述べられている。このマデアルの〈到達〉の用法は、〈スケール極限值用法〉のクライの用法とかなり一致しており、そのために違和感なく言い換えることができているのだと思われる。ただしマデアルに含まれている副助詞マデが着点を示し、同時に始点を想定させるものであるため、このマデアルによって想定されるスケールは何らかの方向性を持ったものであると考えられる。一方、クライで想定されるスケールは特に方向性を持たない。この点において〈スケール極限值用法〉のクライと〈到達〉のマデアルは少々異なっているといえる。

#### 4. 丹羽（1992）との比較

3章では評価を軸としないクライの分類を行った。この章では、3章のクライの分類の観点から、丹羽（1992）の分類を見ていきたい。

まず、最も大きく違いが出るのが丹羽（1992）で〈高程度〉に分類されているものである。丹羽（1992）で〈高程度〉として挙げられているクライ文は5つあった。

- (19) a. 透き通るクライ色が白い。[丹羽 1992: 1122, (1a)]<sup>3</sup>  
b. 鯨クライもある大きなセイウチが発見された。[丹羽 1992: 1122, (1c)]  
c. 警察はつぎの日またやって来て、今度はMの持っていた本やらなにやら全部外に引っ張り出して往来の真ん中で火をつけた……こっちにまで飛火して火事になるんじゃないかと思ったクライだよ。[丹羽 1992: 1122, (2)]  
d. この話グライ面白い話は（他に）ない。[丹羽 1992: 1122, (4a)]  
e. 二人で過ごす時クライ楽しい時間は（他に）なかった。[丹羽 1992: 1122, (4b)]

3章と同じくクライの前節要素をP、Pクライによって程度が表される部分をQとすると、確かにクライの前に置かれたPはどれも程度が高いという評価を与えられたものである。しかし評価を軸としない観点からみると、その分類は大きく異なってくる。

(19a)は色の白さというQの値が、「透き通る」を極限とした「白い」スケールにおいて、「透き通る」までには至らないもののそれに相当するほどに程度が大きいことを示しており、3章の分類では〈スケール極限值用法〉にあたる。(19b)はセイウチの大きさというQの値が、鯨というPの値とおおよそ同等に大きいことを示しており、3章の分類では〈値指示用法〉にあたる。(19c)はQにあたるものが文中で明確に出されていないものの、文脈から火の勢いをQと仮定すると、Qの値を「こっちにまで飛火して火事になるんじゃないかと思った」というPの表現によって大変な勢いだったのだろうと推測させており、用法としては3章の〈結果状況用法〉にあたる。

また(19d)と(19e)の～クライ…ナイという表現については、3章では触れていなかった。丹羽（1992）では高程度の否定によって最高程度を表すとされており、確かにそれぞれの文の意味としては、(19d)は「この話」が最も面白い、(19e)は「二人で過ごす時」が最も楽しいという最高程度の意味になる。ただクライの機能について見れば、(19d)は「この話」というPと、「面白い話」というQの値が同じ「面白い」スケールにおいて同等であるPクライQ文であり、PクライQの否定によって結果的に最高程度が表されているにすぎない。このことから、クライの機能に関して問題となるのはPクライQの部分までであると

---

<sup>3</sup> 以降の丹羽（1992）から引用した例文は、筆者がクライをカタカナ表記に変え、元の例文から「ほど」「程度」を削除したものである。

考えれば、(19d)(19e)は～クライ…ナイという特殊な形ではあるが、評価を軸としない分類においては(19b)と同じく〈値指示用法〉に含まれる。

Pによって表される程度の評価だけを見れば、確かに(19)の例文のPは全て高い程度を表している。しかしPクライによるQの値の表し方を見ると、(19a)はQの値がPという極限值には至らないがそれに相当するということによって程度が高いことを示し、(19b)(19d)(19e)はQの値がPの値と同等であるということによって程度が高いことを示し、(19c)はPという状況でQの値を推測させることによって程度が高いことを示している。結果的には全て高い程度でも、Pには至らないもののそれに相当する程度、Pの値と同等の程度、Pによって推測される程度と、その程度の表し方は全く異なっているのである。加えて表し方が違えばクライの機能も異なってくるため、やはり評価を軸として分類を行うのは問題があるように思われる。

逆に分類にあまり違いが出ないのが〈最低限の例示〉の用法である。3章の〈最低限の例示〉についての説明でも触れたように、本論文における評価を軸としない分類における〈最低限の例示〉の用法と、丹羽(1992)における〈最低限の例示〉はほとんど同じものである。異なる部分としては、3章の〈最低限の例示〉の用法は丹羽(1992)の分類と違い取り立て用法に限定していないため、丹羽(1992)における〈最低限の例示〉よりも該当する範囲が広い。この違いによって3章の〈最低限の例示〉に含まれることになるのが、丹羽(1992)の〈低程度〉の一部である。

- (20) a. 効用と言えば、せいぜい人に安心感を与えるクライだ。[丹羽 1992: 1123, (6a)]  
b. 私はアルメニア語は話せないが、基礎語彙や動詞の活用などを調べてアルメニア語であるかないか判断できるクライの知識はある。[丹羽 1992: 1123, (6b)]  
c. 山田クライの学生ならいくらでもいるよ。[丹羽 1992: 1123, (6c)]

以上の3つの例文が丹羽(1992)における〈低程度〉のクライ文である。クライと結びつく前節要素をP、Pクライによって程度が表される部分をQとし、それぞれの文を見ていきたい。

まず(20a)は「せいぜい人に安心感を与える」がP、「効用」がQにあたるPクライQの倒置文である。この文は「効用」が低い程度であることを示す文であるが、その程度の低さは具体的な数値や同等の値を持つ事柄によって特定されるものではなく、「せいぜい人に安心感を与える」というPによって推測させるものであるため、3章の分類においては〈結果状況用法〉に該当する。(20b)は「基礎語彙や動詞の活用などを調べてアルメニア語であるかないか判断できる」がP、「知識」がQにあたるPクライQ文であるが、こちらもPという状況によってQの程度を推測させるものであるため、3章の分類では〈結果状況用法〉に該当することになる。最後に(20c)だが、この例文は焦点を「山田」「学生」の

どちらに置くのかによって意味が変わってくるように思われる。焦点が「学生」に置かれている場合、「山田」が P、「学生」が Q にあたり、P クライによって Q の程度が表される P クライ Q の文となる。このとき Q の値はおおよそ P の値、つまり「山田」によって特定される程度と同等であると示すことによって、結果的に低い程度を表すことになり、3 章の分類では〈値指示用法〉にあたる。一方焦点が「山田」に置かれる場合、P にあたる「山田」の程度がクライによって低く扱われる P クライ文となり、3 章における〈最低限の例示〉の用法であると解釈できる。このように焦点が「学生」に置かれている場合、(20a)と(20b)が〈結果状況用法〉、(20c)が〈値指示用法〉となり、〈高程度〉の時と同様に程度の表し方が同じ分類内で異なっていることになる。また焦点が「山田」に置かれている場合もクライなしで P が既に程度が低いという評価を持っているものと、クライによって程度が低いという評価を与えられるものが混ざっていることとなるため、やはり全て〈低程度〉としてまとめるのは少し問題があるように感じられる。

また同じく丹羽（1992）の分類と 3 章の分類とで大きな違いが見られないのが〈概量〉の用法である。

- (21) a. 十分クライ待った。[丹羽 1992: 1125, (10a)]  
b. 五回クライは行ったことがある。[丹羽 1992: 1125, (10b)]  
c. この二日クライが山だね。[丹羽 1992: 1125, (11a)]  
d. 一時間クライを練習に当てた。[丹羽 1992: 1125, (11b)]

上記の例文が丹羽（1992）における〈概量〉の文である。丹羽（1992）では〈概量〉の用法はクライが数量詞を伴う場合に限定されている。一方 3 章における〈概量〉の用法はクライと結びつく前節要素 P を数量詞に限定していないため、〈最低限の例示〉と同じく丹羽（1992）の〈概量〉よりも該当範囲が広がっている。

次に丹羽（1992）の〈例示〉の用法を見ていきたい。

- (22) a. 軽井沢グライで遊びたいね。[丹羽 1992: 1125, (12a)]  
b. 中元はビールグライがいいんじゃない。[丹羽 1992: 1125, (12b)]  
c. 木曜日クライから始めよう。[丹羽 1992: 1125, (12c)]  
d. 地下室にはワイン倉を持ち、エルザスの作り酒屋から直接購入していることグライが友人への自慢の種で……[丹羽 1992: 1126, (12d)]

上記の例文が丹羽（1992）において〈例示〉に分類されるものである。3 章の分類の観点から見ると、クライと結びつく P に焦点が置かれ P クライで完結している点、P をあるスケール上の値として扱い P クライの形でおおよその範囲を示している点から、

(22a)(22b)(22c)の3つは本論文において〈概量〉に分類されると考えられる。また(22d)は聞き手の解釈にもよるが、「地下室にはワイン倉を持ち、エルザスの作り酒屋から直接購入していること」がグライによって低く評価されていると判断される場合、3章の分類では〈最低限の例示〉の用法にあたる。そうでない場合は他の3つの例文と同じく〈概量〉に分類される。

続けて、丹羽（1992）の〈適當程度〉〈同程度〉について見ていきたい。

(23) 病氣しないクライに頑張りなさい。[丹羽 1992: 1123, (7a)]

(23)は丹羽（1992）では〈適當程度〉に分類される。3章の分類で考えると、「病氣しない」がP、「頑張りなさい」がQにあたり、一体どの程度頑張るのかというQの値をPによって推測させているため、この文は丹羽（1992）の〈高程度〉〈低程度〉の一部の例文と同じく〈結果状況用法〉にあたる。〈高程度〉〈低程度〉の一部と〈適當程度〉のクライ文は丹羽（1992）ではPの程度評価や要素によって別々に分類されているが、3章の分類の観点ではPの程度が異なってもクライの機能は同じであるため、同じ用法として分類される。

(24) a. 君は今、トルコ東部の住民と同じクライにこの国を理解したわけだが、それで以前より幸せになったとは言えないだろう。[丹羽 1992: 1124, (8a)]  
b. 前回クライの記録ができれば十分だ。[丹羽 1992: 1124, (8b)]

上記の例文は丹羽（1992）において〈同程度〉に分類される。3章の分類で見ると、(24a)は「トルコ東部の住民と同じ」がP、「この国を理解した」がQにあたり、(24b)は「前回」がP、「記録」がQにあたる。これらはどちらもPの値がQの値と同等であることを示しており、丹羽（1992）の〈高程度〉〈低程度〉の一部の例文と同じく〈値指示用法〉に分類される。

最後に、丹羽（1992）の〈不定程度〉について見てみたい。〈不定程度〉として分類されているのは、以下のような例文である。

(25) a. どれクライのものなんだろう？[丹羽 1992: 1124, (9a)]  
b. どのクライ来ているの？[丹羽 1992: 1124, (9b)]  
c. どれグライ驚いたことだろう。[丹羽 1992: 1124, (9c)]  
d. どれグライかは入っている。[丹羽 1992: 1124, (9d)]

このような「どれクライ」などの疑問詞＋クライの表現は丹羽（1992）では〈不定程度〉

とまとめられているが、疑問や不定の意味を持つのはクライと結びつく疑問詞の方であり、クライ自体の役割は結びついたものの範囲を広げるのみであるため、本論文の分類では〈概量〉用法に含んで良いのではないかと考えられる。

以上より、丹羽（1992）の分類と本論文の3章の分類ではクライの用法の分け方が大きく異なっていることが確認できた。特に丹羽（1992）において〈高程度〉〈低程度〉とされているものは、クライの前節要素の高低評価は同じであっても、程度の表し方およびクライ自体の機能が異なっているため、3章の分類ではさらに細かく分類されるようになっている。また〈最低限の例示〉〈概量〉で見られたように、丹羽（1992）の分類と比べ本論文の3章の分類の方が該当するものの範囲が広がっている場合があるのは、3章の分類がクライの前節要素によったものではなく、文章中におけるクライの機能に重点を置いた分類であるためだと思われる。確かにクライは様々な評価を持った前節要素と結びつくことができるが、前節要素の評価の違いがクライの機能の違いに繋がっているとは考えにくい。これよりクライの前の要素によって分類を行う、評価を軸としたものよりも、評価を軸としない方がクライ自体の機能に沿って分類を行うことができると主張したい。

## 5. まとめ

本論文では、評価を軸としないクライの分類について考えてきた。まず2章では、評価を軸としたクライの分類の代表として丹羽（1992）を取り上げ、その問題点について考察を行った。丹羽（1992）ではクライが前節要素へ高低評価を与えているかのように述べられ、分類が行われていたが、考察の結果クライが前節要素へ高低評価を与えているのではなく、前節要素がはじめから高低評価を持っていると考えるべきであると結論付けた。またクライが高低評価を与えていないと解釈した場合であっても、丹羽（1992）はクライ自体の意味ではなくクライの前後の文脈に引っ張られたものになってしまうため、やはりクライの分類案としては不十分であると考えられた。

3章では2章を踏まえ、評価を軸としないクライの分類を行った。分類はクライと結びつく前節要素をP、Pクライによって修飾される部分をQとおき、Pクライ文とのPクライQ文の区別や、その文におけるクライの機能によった。その結果、合計で5つの用法に分類することができた。

Pクライ文は〈概量〉〈最低限の例示〉の2つの用法に分けられた。〈概量〉は「おおよそP」という概量を表す用法、〈最低限の例示〉はPへ低い評価を与える用法である。

PクライQ文は〈値指示用法〉〈結果状況用法〉〈スケール極限值用法〉の3つの用法に分けられた。〈値指示用法〉はPが何らかの状況を示しており、Qのスケール上の値をPクライで特定する用法、〈結果状況用法〉はPがQの結果として生じる状況であり、Pという状況を述べることによって聞き手にQの値を推測させる用法、〈スケール極限值用法〉はQについてどのようなスケールを取るか、Pでスケールの端を示し、Qの値がそのスケールにおいて合格点に達していることを示す用法である。

最後に4章で丹羽（1992）におけるクライの分類と本論文におけるクライの分類との比較を行った。その結果両者で大きく分類の異なるものや、大きな違いはないが本論文における分類の方が該当するクライ文の範囲が広がるものが見られた。これらの差異はクライの前節要素によった分類か、クライによる程度の表し方によった分類かという違いによって生じたものであると考えられる。確かに丹羽（1992）の分類に見られるように、クライは様々な評価を持った前節要素と結びつくことができる。しかし前節要素の持つ高低評価が同じであっても、程度の表し方が異なっている場合があり、前節要素の評価の違いがクライの機能の違いに繋がっているとは考えにくい。よってクライによる程度の表し方に着目した、評価を軸としない分類の方が、よりクライ自体の機能に沿った分類ができるといえるだろう。



## 参照文献

- 安部朋世（1999）「「とりたて」のクライ文の意味分析」『筑波日本語研究』4: 1-15.
- 井島正博（2008）「クライ・ホド・ナド・ナンカ・ナンテの機能と構造」『日本語学論集』4: 42-97.
- 香月望美（2018）「マデアルの意味の拡張と新用法」卒業論文, 九州大学.
- 加藤安彦（1996）「国定読本における副助詞「くらい」と「ぐらい」」『国立国語研究所研究報告集』17: 93-125.
- 須川友美（2006）「日本語の程度をあらわす助詞について ～ホド、クライの意味と用法～」卒業論文, 九州大学.
- 田中聡子（2003）「「くらい」の意味的特徴 - 「ほど」との比較を中心に -」『言葉と文化』4: 277-292.
- 丹羽哲也（1992）「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』大阪市立大学大学院文学研究科紀要, 44(13): 1115-1150.
- 丸山直子（2001）「副助詞「くらい」「だけ」「ばかり」「まで」の、いわゆる〈程度用法〉と〈とりたて用法〉(室伏信助教授記念号)」『日本文学』95: 141-162.

## 謝辞

本論文の執筆にあたり、指導教官の上山あゆみ先生には大変丁寧なご指導を賜りました。お忙しい中何度も面談をしてくださり、本論文の完成に向けて様々な助言をいただきました。心より感謝申し上げます。また言語学に関する様々な知識を教えてくださいました、九州大学文学部言語学・応用言語学研究室の久保智之先生、下地理則先生、太田真理先生をはじめ、ここまで支えてくださった研究室の皆様へ、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。